

## 世田谷区立希望丘保育園「最優秀園実践発表会」開催レポート

2021年10月16日（土）、2020年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「最優秀園」を受賞した世田谷区立希望丘保育園による、「最優秀園実践発表会」を開催しました。新型コロナウイルス感染防止のためZoom ウェビナーによるオンラインで実施いたしました。南は沖縄県から北は北海道までの認定こども園・幼稚園・保育所・小学校・中学校・大学等の教育・保育関係者から異業種の方も含めて約320名（端末数）を超えるご参加がありました。

以下に世田谷区立希望丘保育園による開催レポートを掲載します。

### 発表会概要

- 日時：2021年10月16日（土）9：50～12：35
- 主題：科学する心を育てる  
「様々な直接体験を通して探究心を育てる」  
～発見、不思議、好奇心を仲間と共感できる環境を大切にしながら～
- プログラム
  - 開会式 9：50～10：00  
挨拶：盛田 昌夫氏/公益財団法人 ソニー教育財団  
保坂 展人氏/世田谷区長
  - 研究発表 10：00～10：35
  - シンポジウム 10：35～11：15  
コーディネーター：  
鎮目 健太氏/保育課乳幼児教育担当係長  
シンポジスト：  
田澤 里喜氏/玉川大学教育学部准教授  
橋本 ひろみ氏/世田谷区教育委員会教育支援員  
島崎 智恵氏/世田谷区立中町幼稚園園長  
伊藤 美智子氏/保育課保育育成支援担当係長
  - 記念講演 11：20～12：30  
登壇者：大豆生田 啓友氏/玉川大学教育学部教授
  - 閉会式 12：30～12：35  
挨拶：根本 章二氏/公益財団法人 ソニー教育財団  
謝辞：城内 明美/希望丘保育園園長

### 研究発表 「～2020年のっばらと子どもたち～2021年成長し続けるのっばら～」

まず、「虫のようにしなやかに野草のようにたくましい心を育てる～のっばらプロジェクト～」をテーマに2020年度の取り組みの内容を担当から発表した。

「のっばらプロジェクト」は、「都市部にある保育園でも、自由に虫探しができる環境を作りたい」「子どもたちが自然や四季の変化を感じ、多くの生き物に出会いながら、心が動く体験を存分にしてほしい」という職員共通の思いからスタートし

た。また、「科学する心」は直接の体験から育まれると想定し、子どもたちも保護者も園の職員も一体となって本プロジェクトに取り組んだ。

「科学する心」についての園の考え方を根底に、「虫の収集と発見の喜び→増していく虫への興味→関心から探究心の芽生えへ」のプロセスに沿って事例を報告した。子どもたちの姿と共に、「なんでも図鑑」や「のっばら便り」「のっばらグラム」など、子どもたちの発見や興味など姿を可視化し、園全体で共有する工夫や、デジタル顕微鏡などのツールの活用も含めた様々な環境の工夫が子どもたちの好奇心や探究心など「科学する心」の育ちを支えていた。

「のっばらプロジェクト」を通して、子どもたちが生命に出会い、好奇心を湧かせ、驚きや喜びが、小さな科学の芽となってやがて「科学する心」の育ちにつながった。そこには、子どもたちと同じ目線で感動し、一人一人の思いや姿を丁寧に読み取りながら寄り添い、必要な環境を工夫する保育者の存在が不可欠であった。

次に、その後の取り組みについて、学年ごとに子どもたちの姿をまとめ、保育者が子どもたちの姿に丁寧に寄り添い記録をとってきたことで、子どもを見る視点が深まってきたことを、日々の記録、一場面から子どもたちの姿を考察した。

### 【0歳児】安心できる保育者と共に

安心できる保育者と一緒にバッタや、カブトムシなど初めての自然との触れ合いを経験している。

### 【1、2歳児】身近な生き物との出会い

1、2歳児は昨年の経験の積み重ねから「自分で探したい」「捕まえない」と虫のいる場所に向かっている。また、生き物の姿にジーっと見入っている友達が、幼虫などに触れている姿をみて「怖い」から「触ってみたい」と手を伸ばす姿が見られている。

### 【3、4、5歳児】仲間と語り合いながら好奇心・探究心を深めていく

3、4、5歳児期になると、保育者や友達と「これってどうなるんだろう」と話しをする中で、自分の気付いたことを友達に伝え、自信をもち、さらに図鑑や顕微鏡で調べ、好奇心、探究心を深めている。

### 【4歳児：ダンゴムシ発見を伝えたい】自分のダンゴムシを育ててみよう

飼育ケースにたくさん入っているダンゴムシを眺め、「もうたくさんいるね」と子どもがつぶやく。数えると293匹もいた。収集に満足し、観察することに関心が向いてきたため、個人ケースを作り、自分だけのダンゴムシの世話をすることにした。

観察していくうちに、真白だったダンゴムシの赤ちゃんの背中が黒く変わってきていることに気づく。また、赤ちゃんがいるとお腹が黄色くなるということ、図鑑で知った子どもが、周りの友達にも伝え、クラスの中では、共通の知識となり、お腹に赤ちゃんがいるダンゴムシを探し観察している。すると、ダンゴムシがお腹から出てきているまさにその瞬間を発見し、大興奮で周りにいた職員、友達みんなに伝えていた。

自分で発見したことが自信となりまた、全体場で共有することで、クラス全体の知識となり、さらなる探究心につながっていった。

### 【職員の意識・職場風土】

子どもたちがのっばらとの関わりの中で目を輝かせている姿を今年度も職員全員が毎日、目の前で見て感じている。用務職員は、金魚やエビなどを日々世話するなかでじっと観察し、卵を別の入れ物にわけ、繁殖に成功した。また各クラスでも飼育物を飼っており、職員も今まで以上に生き物や植物に関心を向け、愛情を感じるようになってきた。

「のっばら」を中心として職員同士が発見や気づき、楽しさ、また疑問や不安をいつでもだれにでも相談し全職員誰とでも語り合えるこの職場風土こそが子どもたちに寄り添う視点や新たな試みへの原動力になっているのである。



### 【5歳児】日常の遊びの中で実体験を通して感動の一瞬を仲間と共有していく

5人で集まり、バッタを捕まえる。互いに声を掛け合い、連携プレーで協力しながらバッタを捕まえていた。アゲハチョウの幼虫との出会いでは、幼虫が怒って出す角が「くさい」ということを実際に匂いを嗅ぎ合う中で感じ、「本当にくさい」と実感した。カブトムシを継続して育てていく中で昨年さなぎが死んでしまった経験から「前に飼っていたぷりんちゃんに似ている」「今度は死なないようにしなくちゃね」と刺激を与えすぎないようにそっと触っていた。仲間と一緒に遊び、感動や驚きや考えを言葉で伝えあい、試す中で仲間との一体感や連帯感がふかまってきた。また、昨年の失敗を生かし、命の大切さに気付く姿が見られている。



### 【おでかけひろば・にじの畑の様子】

今年は、保育園に併設している地域親子子育てひろば、「おでかけひろば・にじ」の庭にも畑や野草を増やした。幼い頃自然に触れた経験がなく虫が苦手という、世代が多いひろば利用者にも、親子で身近な自然と触れ合える機会となっている。

### 【のっばらの環境維持のための工夫】

3月子どもたちとクローバーや、バッタの好きなシソ、イネ科の種を撒いた。2021年度は保護区のプランターを増やし、職員一人一人が思い思いの野草を植えた。春、一面に緑が広がった。8月「なんで今年はバッタが少ないのだろう」と、職員や子どもに疑問が生まれた。散歩に行けず、バッタを捕まえて逃がしていないから？草が伸びすぎて、低い草を好むバッタが来ないのかもしれない。そんな考えから、のっばらの草刈りをすることにした。結果、草を刈ったことで、伸びた草の間に隠れていた背の低いシソにたくさんのバッタやキアゲハの幼虫を発見することができた。



今回の草刈りで環境を定期的に見直し、状況に合わせた手入れをしていくことの大切さに改めて気づいている。用務職員は、金魚やエビなどを日々世話する中でじっと観察し、卵を別の入れ物に分け、繁殖に成功した。また各クラスにも飼育物を飼っており、職員も今まで以上に生き物や植物に関心を向け、愛情を感じるようになってきた。

「のっばら」を中心として職員同士が発見や気づき、楽しさ、また疑問や不安をいつでもだれにでも相談し全職員誰とでも語り合えるこの職場風土こそが子どもたちに寄り添う視点や新たな試みへの原動力になっている。

### 【保護者との共有について】

保護者の方へも日々の子どものワクワクを伝えるために、のっばらグラムの掲示とともに、新たにエントランスにカエルの家、金魚の水槽を置いた。保護者の方が自然と直接触れ合え、登降園時の親子での会話のきっかけや楽しみの場となっている。



### 【まとめ】

職員の入れ替わりや子どもの関心の向け方、その年の環境など状況は変わっていきっている。しかし、自然との直接体験を通して心が揺り動かされる子どもの感動はいつの時代も変わらない。この豊かな自然環境「のっばら」を維持することで、これからも直接体験を通して、子どもの気づき、不思議を追求・探究する思いに共感し大切に寄り添い「科学する心」の芽を育てていきたい。

## ★研究発表での質疑応答★

事前に、参加者に受賞論文及び発表資料を読んでいただき、予め質問を受け付けるとともに、当日もチャットで質問を受け付けた。以下の質問について、担当者より具体事例を通して返答した。

Q1：のっばらプロジェクトを通して子どもや保護者にどのような変化がありましたか？

A1：虫への関心が広がりや深まりから虫を気遣うまでに心が成長していった。保護者は子どもと共通の話題で子ども理解につながる。また、保護者自身も興味を持ち面白くなる。それがさらに子どもの意欲や自信が膨らんでくる。

Q2：生き物の取り扱いについては大人の価値観を押し付けてしまっていると痛感。希望丘保育園は子ども自身が気づくまで待つ保育者の姿勢が通底している。職員がどのように保育者自身の気づきや学びを得てそれを園方針として共有できていますか？

A2：子ども一人一人の主体性を引き出す働きかけを心がける、また子どもの姿勢を肯定的な視点で捉えていくことを世田谷区の保育の根底としています。子どもと「のっばら」のかかわりの中で一見残酷なように見えますがありのまま受け止め、その思いを保育者と共感し次の学びへとつなげていきます。実体験を継続していく中で生き物に対する愛情が芽生え、その子なりの生き物に対する倫理観を身に着けていくと考えています。

Q3：子どもの興味や関心を深めていくために、心がけていることはどのようなことですか？

A3：子どもの興味や関心の小さな芽というのはいろいろなところに落ちていて、言葉だったり、表情であったりをどんな風に見逃さずに保育に取り入れていくか、ということをととても大事にしています。

大人が、ゴールや予測を立てて決めてしまうのではなく、子どもの求めているありのままの気持ちや姿を受け止め、子どもたちと一緒に進める、考えるということを中心に心がけています。



Q4：自然環境を豊かにしたり、虫や生き物への知識を広げたりするために、職員研修などを行っていますか？

A4：職員研修などは時間を特別に作っては行っていません。例えば虫の成育範囲を広げるために複合施設の屋上に緑のスペースを作ったら、もっと虫の範囲を広げられるのではないかという考えをもっている職員や、用務職でも水生生き物をよく知っていて世話をしてくれる職員など、生き物に詳しい職員がいます。その職員の得意な部分を聞いたり、ネットで情報を得たものを職員間で日常的にワイワイしゃべりながら試したり作ったりしていくというような方法で行っています。

## シンポジウム 「仲間と共感できる環境を通して育まれるものをつないでいく」

コーディネーター：保育課乳幼児教育担当係長 鎮目 健太氏

内容：①子どもの科学する心をはぐくむ園の職員の風土について

玉川大学教育学部准教授 田澤 里喜氏

②実践にみられる探究的な学びと小学校以降の学びへのつながり

世田谷区教育委員会教育支援員 橋本 ひろみ氏



③乳児からの実践と幼児期の学び ～幼稚園生活との共通性を中心に～

世田谷区立中町幼稚園園長 島崎 智恵氏

④実践が広がる可能性 ～地域ネットワークの視点から～

保育課保育育成支援担当係長 伊藤 美智子氏

シンポジストの皆様は、事前に保育を見学いただいた時のエピソードや感想と共に、「仲間と共感できる環境を通して育まれるものをつないでいく」をテーマに、参加者に事前に配布した資料を基に、それぞれの立場から①～④の内容についてお話いただいた。

田澤氏は、「科学する心が伝播する職員風土」「大人にも科学する心を」「いろいろな職員が認められる保育」など、本園の実践を例に、保育の質の向上が期待できる保育者風土について述べられた。

橋本氏からは、「のっばらプロジェクト」で見られた子どもたちの育ちが、どのように小学校以降につながっていくのか、「学習指導要領で目指す資質・能力の育成」などを通して、解説いただいた。

島崎氏からは、本園の実践について、「環境を通して行う保育・教育の重要性」「体験・経験を通して学ぶことの大切さ」など、保育で大切にしていきたいことを保育指針や教育要領に絡めてお話いただいた。

伊藤氏からは、世田谷区の保育の質ガイドラインに触れ、地域のネットワークを充実することで、保育の質の向上につなげていく取り組みの重要性をお話いただいた。

☆シンポジウムまとめ☆

園の中に「これ見てください、これ伝えたいです」という思いがあるということが、子どもが育つ場所として、職員が働く場所として、本当に大切なことである。希望丘保育園は生き物や自然に詳しい人、詳しくない人、それぞれが「のっばら」との関わりを面白がっている。そのことがどんどん連鎖していくような環境であるからこそ、伝えたい、見に来てほしいという職場風土や保育になっている。

記念講演「科学する心を育てる保育を考える」 大豆生田啓友氏/玉川大学教授

「科学する心を育てる保育を考える」を演題に、玉川大学教授 大豆生田啓友氏による記念講演の講演内容を以下にまとめる。

講演メニュー

- ・ 事例1：希望丘保育園の実践についてのコメント  
(のっばらプロジェクトの取り組み)
- ・ 事例2：けやきのもり水族館日誌 (やかまし村)
- ・ 事例3：2歳児の水道遊び
- ・ 事例4：ロケットプロジェクト (つばさ保育園)
- ・ 事例5：雨の水からの活動 (阿武山たつの子認定こども園)
- ・ 保育の質と科学する心
- ・ 質疑応答



園を訪問した際の様子や発表論文の実践事例も併せて、様々な角度から、保育の質、「科学する心」について話をされた。希望丘保育園の職員、子どもがよく語る。子ども達の作品を見ても同じ場面を見ているもそれぞれ心が動いた場面が違うため、一人ひとり表現が違い、一つひとつの作品に学びの物語(ラーニングストーリー)が隠されている。自然が近くにあることで、大人が想定しえないような大変なドラマが起こる。この環

境を用意し、子どもが心動いた事を、様々な形で表現することは大事なことである。

また、のっばらグラムのように、写真で残すことは、人が共有する上で、一つの対話が生まれ、共同注視（一緒に見合う）関係が生まれてくる。そこに、問いが生まれ、探究心が芽生える。

今回の実践で重要な事は、園庭にビオトープ（生き物の生態循環系）をつくったということ。ビオトープという言葉が誤解されやすいが池や水場のある場所がビオトープではなく、生き物の循環生態系をつくることを言う。希望丘保育園は保護区を設置しているということも大事で、子ども達の観点から言うと、踏みつぶすということは議論になるが、「ここは入らないようにしましょう。踏まないようにしましょう」「命を大事にしよう」と言う事がしっかりと育っている。実践事例のカマキリの1年にもあるように散歩から持ち帰ったカマキリを育てていく中で、愛着を持ち変化をいとおしいと感じる中で、名前を調べて、身体測定をおこなった。5、6歳の子どもは専門的に知りたいという気持ちがある。ワクワク面白がり、興味を持って、愛着を持ち変化をいとおしいと思う、非認知能力が、調べる、測るといった知的な好奇心、認知能力とつながってくることも大事である。また、バッタを食べたということ、残酷ということでもなく、「食べたんだ」と淡々と知っている。



保育園、幼稚園、こども園などは、共主体（co-agency）つまり、いろいろな人が関わって協同しながら学びの場を生成し、交わり社会形成につながっていくような文化的実践の協同の場になっていく。つまり、園は地域の中にある子育て期の親が「自然はこんな風に大事だ」ということを、実践を通して親たちも学ぶ場になっており、一人一人が人として大事にされ、繋がりをつくっていく、街づくりの拠点としての役割がある。まさに、希望丘保育園の取り組みがそうである。

保育から、どう持続可能な社会をつくっていく場になるかということが重要。地球の資源をどう大事にしていくか。共主体の中に、自然も入っている。子ども主体の保育は、保育者も主体、保護者も、地域もまた、自然も主体である。環境教育として子どもに話を伝えるのではない。実体験の中で、環境を通して自然をどう大事にしているか、地球温暖化も含めた自然環境の問題を、0歳児から自然に親しみ、自然に触れることが楽しいと実感を持つ中で、大人が丁寧に関わっていくと、自然や命、環境を大事にしたいという気持ちが芽生えてくる。

また、他園の事例からもわかるように、子ども主体の遊びの総合的な保育は、面白いと思いきワクワクすることを大事にされる非認知的なことと、物の仕組みへ興味関心をもったり、数量に関心をもったりする認知的なことの両方が関係しながら育っていく。つまり、遊びのように夢中になることが「科学する心」につながる。

保育の中にある科学する心の芽とは、自然に親しみ、驚き感動する心、動植物に親しみ命を大事にする気持ちを大事にする心、人との語らいを大事にして思いやりという心、遊び、学び、共に生きる周りの人との共感、好奇心や考える心、表現しやり遂げる心。心が動くことが学びの原点である。